

## 注意事項

1. 試験問題の数は30問で解答時間は正味1時間40分である。
2. 解答方法は次のとおりである。

(1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを(例1)では一つ、(例2)では二つ選び答案用紙に記入すること。

(例1) 101 県庁所在地 (例2) 102 県庁所在地はどれか。

はどれか。

- a 栃木市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

2つ選べ。

- a 宇都宮市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

(例1)の正解は「c」であるから答案用紙の(c)をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

101	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)
			↓		
101	(a)	(b)	●	(d)	(e)

答案用紙②の場合、

101	101
(a)	(a)
(b)	(b)
(c)	→ ●
(d)	(d)
(e)	(e)

(例2)の正解は「a」と「c」であるから答案用紙の(a)と(c)をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

102	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)
			↓		
102	●	(b)	●	(d)	(e)

答案用紙②の場合、

102	102
(a)	●
(b)	(b)
(c)	→ ●
(d)	(d)
(e)	(e)

- (2) ア. (例1)の質問には二つ以上解答した場合は誤りとする。  
イ. (例2)の質問には一つ又は三つ以上解答した場合は誤りとする。

次の文を読み、1～3の問いに答えよ。

34歳の男性。急速に強くなった腹痛のため搬入された。

現病歴：昨日、夕食を午後8時に摂取した。午後11時ころに臍部を中心とした腹痛があり、最初は普通便、続いて水様便が始まり、夜間にも3回排便があった。妻もその頃から下痢を認めていた。今朝は朝食を摂取せず出社した。出社後、腹痛が周期性となり、血液の混じった粘液便を2回認めた。痛みのためうずくまっていたため、同僚が救急隊を要請した。

既往歴：特記すべきことはない。

生活歴：飲酒はビール1本を週に1回。喫煙はない。最近1年の海外渡航歴はない。

現症：意識は清明。顔貌は苦悶様。身長165cm、体重64kg。体温38.3℃。脈拍96/分、整。血圧106/80mmHg。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常を認めない。心音と呼吸音とに異常を認めない。

1 この患者に予想される身体所見はどれか。

- a 肋骨脊柱角叩打痛
- b 腸雑音亢進
- c 筋性防御
- d 腹部膨隆
- e 反跳痛

2 この患者で有用な検査はどれか。2つ選べ。

- a 便培養
- b 便虫卵検査
- c 便脂肪染色
- d 便中ペロ毒素検査
- e 便中ロタウイルス抗原検査

3 この患者に対する治療で適切でないのはどれか。

- a 麻薬性止痢薬投与
- b 静菌性抗菌薬投与
- c 解熱薬投与
- d 整腸薬投与
- e 輸液

次の文を読み、4～6の問いに答えよ。

72歳の男性。眼瞼下垂、複視および易疲労性を主訴に来院した。

現病歴：2か月前から疲れやすさを自覚し、眼瞼が下がり、物が二重に見えるようになった。午前中は程度は軽いが、午後になると眼瞼の下垂と疲労とが増悪する。最近では階段の上りや重いものを運ぶのが次第に困難になってきた。

既往歴：50歳時に肺結核と診断され、抗結核薬を1年間で内服した。

現症：意識は清明。身長170 cm、体重58 kg。脈拍60/分、整。血圧130/82 mmHg。両側に眼瞼下垂を認め、1分間上方注視させると下垂は増悪する。全方向で複視を認めるが、瞳孔は左右同大で対光反射は正常である。頸部屈筋と四肢近位筋とに筋力低下を認め、握力は両側20 kg。筋萎縮はなく、深部腱反射は正常。感覚障害と自律神経障害とはない。

検査所見：尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球488万、Hb 14.9 g/dl、白血球4,600。血清生化学所見：空腹時血糖75 mg/dl、総蛋白7.3 g/dl、アルブミン4.7 g/dl、CK 120 IU/l(基準40~200)、FT<sub>3</sub> 3.0 pg/ml(基準2.5~4.5)、FT<sub>4</sub> 1.2 ng/dl(基準0.8~2.2)。胸部エックス線写真で肺尖部に陳旧性結核病変を認める。胸部単純CTで前縦隔に異常はない。

4 この患者の診断に有用なのはどれか。

- a 脳幹誘発電位
- b ポリグラフィ
- c 針筋電図
- d 誘発筋電図
- e 神経伝導速度

5 この患者の眼瞼下垂はどの障害によるか。

- a 前頭筋
- b 上眼瞼挙筋
- c 眼輪筋
- d 交感神経
- e 動眼神経

6 治療として、プレドニゾロンを20 mg/日(隔日投与)で開始し、漸増していくことにした。

今後、起こりえる合併症はどれか。2つ選べ。

- a ネフローゼ症候群
- b 大腿骨頭壊死
- c 結核の再燃
- d 間質性肺炎
- e 発癌

次の文を読み、7～9の問いに答えよ。

78歳の女性。咳、食欲低下および体重減少を主訴に夫に連れられて来院した。

現病歴：2、3か月前から軽度の咳が出現した。食欲が徐々に低下し、体重も減少した。易疲労感があり、全身倦怠感を認めた。この1か月は家で横になっていることが多く、食事の用意や家事は高齢の夫がしていた。家族が病院に行くように何度も勧めたが、家から離れたくないと拒んでいた。今のままでは夫の方が倒れてしまおうと説得されて、ようやく近くの診療所を受診した。

既往歴・家族歴：特記すべきことはない。

生活歴：夫と二人暮らし。息子と娘は遠方に暮らしている。

現症：意識は清明。身長153cm、体重32kg。体温37.3℃。呼吸数22/分。

脈拍96/分、整。血圧116/60mmHg。眼瞼結膜に貧血を認める。皮膚はやや乾燥している。心雑音はない。右胸部に呼吸音の減弱を認める。腹部には異常を認めない。下腿に浮腫はない。

検査所見：血液所見：赤血球280万、Hb7.8g/dl、白血球7,200。胸部エックス線写真で右上葉に腫瘤影と右側胸水貯留を認める。左肺に転移巣を疑わせる結節性の陰影が散在している。

経過：進行性の肺癌が強く疑われた。家族の意向もあり、病院の呼吸器科を紹介受診して入院精査が行われた。確定診断は肺癌で、肺内転移と骨転移とが認められた。家で穏やかに過ごしたいという本人の強い希望で患者は自宅に戻り、在宅医療が行われることになった。

7 訪問診療に訪れた診療所医師に、患者は「このまま苦しい思いをして死んでいくのかと不安なんです」と伝えた。

患者のこの言葉に対する医師の返答として適切なのはどれか。

- a 「そんなことを言ったらご主人が悲しまれますよ」
- b 「このまま苦しい思いが続くのではと不安なんです」
- c 「ホスピスという緩和ケアの施設をご紹介しますか」
- d 「家に戻りたいという希望が叶ってよかったですじゃないですか」
- e 「心肺蘇生術を希望するかどうか家族と相談しておいてください」

8 患者の痛みはモルヒネでほぼ抑えられ、時々訪れる孫との会話を楽しみながら患者は少しずつ衰弱していった。

死期が、より間近に迫っていることを示す症候はどれか。2つ選べ。

- a 固形物を摂取しなくなる。
- b 1日中ウトウトして過ごすようになる。
- c 注視能力が低下し視線が定まらなくなる。
- d 口が開いており呼吸の度に下顎が動いている。
- e 咽喉頭部で呼吸時にゴロゴロと苦しそうな音がする。

9 診療所医師として週3回の訪問診療を行い、今朝もその準備をしていたところ家族から電話があった。午前2時ごろに息を引き取ったとのことであった。

訪問して死亡を確認後、手続きとして次に求められるのはどれか。

- a 24時間以内に管轄保健所に届け出る。
- b 24時間以内に所轄警察署に届け出る。
- c 警察の立会いのもとで検視を行う。
- d 遺族に司法解剖の承諾を得る。
- e 死亡診断書を発行する。

次の文を読み、10～12の問いに答えよ。

30歳の1経妊未産婦。陣痛発来のため来院した。

現病歴：妊娠初期から定期的に妊婦健康診査を受けており、妊娠経過は母児ともに順調であった。妊娠39週5日午前2時に自然陣痛が発来し、次第に増強したので午前4時に来院し、入院となった。

既往歴：特記すべきことはない。

月経歴：初経12歳。周期28日、整。

妊娠分娩歴：4年前に妊娠7週で自然流産。

現症：意識は清明。身長162cm、体重63kg(妊娠前50kg)。体温36.4℃。脈拍88/分、整。血圧112/76mmHg。子宮底長35cm、腹囲98cm。下腿浮腫はない。Leopold触診法で児は頭位、第2胎向で、胎児心拍数144/分。胎児超音波検査では児頭大横径95mm、児の推定体重は3,500gである。内診所見では矢状縫合は骨盤横径に一致し、子宮口開大3cm、展退度60%、児頭下降度SP-2cm、子宮口の位置は中央、硬さは軟である。破水は認めない。

10 内診所見における児頭小泉門の位置はどれか。

- a 12時
- b 2時
- c 3時
- d 6時
- e 9時

11 陣痛は次第に増強し、午後2時に自然破水した。午後3時の陣痛の間隔は2分、持続時間は60秒。内診所見では子宮口開大6cm、展退度80%、児頭下降度SP+1cm、子宮口の位置は前方、硬さは軟であった。午後6時に陣痛間隔は5～7分、持続時間は20～30秒となった。小泉門を10時に触知、子宮口開大8cm、展退度90%、児頭下降度SP+2cmであった。その後、陣痛の間隔と持続時間とは変わらず、午後9時の内診所見は不変である。胎児心拍数パターンに異常は認めない。

処置として適切なものはどれか。

- a 経過観察
- b 頸管熟化薬投与
- c 陣痛促進薬投与
- d 会陰切開術
- e 吸引分娩

12 3,800gの男児を分娩した。10分後に胎盤が自然娩出したが、その直後から持続的な性器出血がみられ、子宮底は臍窩上に触知する。

出血の原因として考えられるのはどれか。

- a 腔壁裂傷
- b 頸管裂傷
- c 子宮破裂
- d 弛緩出血
- e 子宮内反症

次の文を読み、13～15の問いに答えよ。

63歳の男性。意識障害のために搬入された。

現病歴 : 2か月前から表情がこわばり、口数が減り、動作も緩慢になった。食事が減り、日本酒1合を毎晩飲む習慣がついた。休むと迷惑をかけると言って仕事には出ていたが、判断力が鈍り、効率が上がらず、ぐったりして帰宅する。妻が病院受診を勧めると、支払い額を気にしてためらう。20年前の仕事上での些細なミスを思い出して「取り返しのつかないことをしてしまった」とつぶやくことがあった。本日夕食後、妻が近くの親類宅まで出かけて1時間後に帰宅すると、奥の部屋で倒れていて、そばにビールの空き缶が1つと妻が時々用いる睡眠薬の空シート20錠分があった。シートの薬は長時間作用型のベンゾジアゼピン系睡眠薬であることが判明した。

既往歴 : 特記すべきことはない。

生活歴 : 高校卒業後、地方公務員としてまじめに勤務し、60歳で定年となつてからは小企業で事務仕事に就き、同僚の信頼は篤かった。

現症 : 呼びかけに反応しないが、痛み刺激にかろうじて開眼する。体温36.9℃。脈拍64/分、整。血圧118/82 mmHg。全身に外傷を認めない。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部はほぼ平坦で、肝・脾を触知しない。

13 生じる可能性が最も高いのはどれか。

- a 脳出血
- b 心停止
- c 誤嚥性肺炎
- d 消化管出血
- e 全身けいれん

14 考えられるのはどれか。

- a 認知症
- b うつ病
- c 統合失調症
- d Parkinson病
- e アルコール依存症

15 意識回復後の対応として最も適切なのはどれか。

- a 精神科治療を勧める。
- b カウンセリングを勧める。
- c プライバシーには触れない。
- d 妻を同伴させて帰宅させる。
- e 人倫にもとる行為であることを教える。

次の文を読み、16～18の問いに答えよ。

59歳の男性。4時間持続する前胸部痛のために搬入された。

現病歴：1か月前から階段を上った際に前胸部絞扼感を自覚した。安静にすると消失するので放置していた。本日早朝に前胸部絞扼感で覚醒した。しばらく我慢していたが次第に増強してきた。

既往歴：5年前から高血圧で降圧薬を服用している。

現症：意識は清明。身長168 cm、体重82 kg。体温36.6℃。呼吸数24/分。脈拍104/分、欠代あり。血圧160/94 mmHg。冷汗を伴い、四肢は冷たい。心雑音はないが、奔馬調律を聴取する。呼吸音に異常を認めない。腹部は平坦で、肝・脾を触知しない。下肢に浮腫を認めない。

検査所見：尿所見：尿蛋白(-)、糖1+。血液所見：赤血球480万、Hb 15.8 g/dl、Ht 46%、白血球9,800、血小板48万。血清生化学所見：総蛋白7.6 g/dl、クレアチニン1.0 mg/dl、AST 88 IU/l、ALT 24 IU/l、CK 540 IU/l(基準40～200)。経皮的動脈血酸素飽和度(SpO<sub>2</sub>)96%。心電図(別冊No. 1A)を別に示す。

別冊

No. 1 図A

16 診断はどれか。

- a 心筋炎
- b 急性心膜炎
- c 大動脈解離
- d 不安定狭心症
- e 急性心筋梗塞

17 治療として適切でないのはどれか。

- a 酸素吸入
- b ヘパリン投与
- c リドカイン投与
- d アドレナリン投与
- e ニトログリセリン投与

18 来院30分後、突然意識を消失し、脈拍は触知不能となった。心電図(別冊No. 1 B)を別に示す。

直ちに行う処置はどれか。

- a IABP
- b 気管挿管
- c 電氣的除細動
- d 血栓溶解療法
- e 心臓ペースメーカー

別冊

No. 1 図B

次の文を読み、19～21の問いに答えよ。

21歳の男性。右下腹部痛と下痢とを主訴に来院した。

現病歴：3か月前から右下腹部痛が持続し、1週間から1日5行の下痢が出現している。今朝から37℃台の発熱を認めている。

既往歴：19歳時、痔瘻の手術を受けた。

現症：身長168cm、体重54kg。体温37.2℃。脈拍72/分、整。血圧118/62mmHg。眼瞼結膜に貧血を認める。眼球結膜に黄染を認めない。右下腹部に圧痛を伴う腫瘍を触知する。筋性防御は認めない。肝・脾は触知しない。

検査所見：尿所見：異常を認めない。血液所見：赤沈48mm/1時間、赤血球310万、Hb9.1g/dl、白血球9,800、血小板51万。血清生化学所見：総蛋白5.8g/dl、アルブミン2.3g/dl、AST25IU/l、ALT25IU/l。CRP3.8mg/dl。大腸内視鏡写真(別冊No. 2A、B)を別に示す。

別冊  
No. 2 写真A、B

19 この患者の下痢の原因はどれか。

- a ホルモン産生
- b 蠕動低下
- c 酵素欠損
- d 細菌毒素
- e 粘膜障害

20 診断に有用なのはどれか。2つ選べ。

- a 小腸造影
- b 腹部造影CT
- c 腹部エックス線単純撮影
- d 選択的腹腔動脈造影
- e 内視鏡的超音波検査

21 治療薬として適切なものはどれか。

- a 緩下薬
- b 抗癌化学療法薬
- c 抗凝固薬
- d 副腎皮質ステロイド薬
- e 非ステロイド性抗炎症薬



次の文を読み、22～24の問いに答えよ。

61歳の男性。複視と歩行障害とを主訴に来院した。

現病歴：今日の午前10時頃、会議中に突然物が二重に見え、右上下肢が動かしづらいことに気付いた。様子をみていたが改善しないため午後5時に来院した。

既往歴：10年前から糖尿病で、5年前からインスリンで加療中である。6年前から高血圧で加療中である。2年前に突然、右上下肢が動かしづらくなり、歩く時ふらつく症状があったため入院したことがある。それらの症状は数日で消失し、1週間で退院した。

家族歴：兄と姉とが高血圧で加療中である。

現症：意識レベルはJCS I-1。顔の表情は正常。身長165 cm、体重52 kg。体温36.2℃。臥位で脈拍84/分、整。血圧156/80 mmHg。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常を認めない。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦で、圧痛と抵抗とを認めない。肝・脾を触知しない。右側方視で左眼は内転できず、右眼に水平眼振を認める。左側方視では両眼とも正常に動く。輻湊と垂直方向の眼球運動とは正常である。右上下肢の筋力低下と深部腱反射亢進とを認める。起立・歩行障害を認める。四肢に不随意運動はなく、頭痛、失語・失行・失認、項部硬直、顔面筋麻痺および聴力障害を認めない。

検査所見：尿所見：蛋白(-)、糖1+。血液所見：赤血球495万、Hb16.0 g/dl、Ht44%、白血球6,500、血小板25万。血清生化学所見：空腹時血糖240 mg/dl、HbA<sub>1c</sub>8.2% (基準4.3～5.8)、総蛋白6.9 g/dl、アルブミン4.8 g/dl、尿素窒素9.2 mg/dl、クレアチニン0.9 mg/dl、AST18 IU/l、ALT14 IU/l。心電図と頭部単純CTとに異常を認めない。

22 病変の部位はどこか。

- a 内包
- b 視床
- c 中脳
- d 小脳
- e 橋

23 診断に最も有用なのはどれか。

- a 髄液検査
- b 脳波
- c 頭部単純MRI
- d 頸動脈超音波検査
- e SPECT

24 治療薬として適切なのはどれか。

- a 抗血小板薬
- b 抗ウイルス薬
- c 免疫グロブリン製剤
- d 副腎皮質ステロイド薬
- e 組織プラスミノゲン・アクチベーター (tPA)

次の文を読み、25～27の問いに答えよ。

42歳の男性。今回初めて会社の健康診断で異常を指摘され来院した。

現病歴：1年前に管理職に昇任し食事時間が不規則となり、体重が約8kg増加した。

既往歴・家族歴：特記すべきことはない。

生活歴：飲酒はビール2,000ml/日を10年間。

現症：身長172cm、体重80kg。体温36.2℃。脈拍76/分、整。血圧152/92mmHg。心音と呼吸音とに異常を認めない。肝・脾を触知しない。下肢に浮腫を認めない。

検査所見：尿所見：蛋白(-)、糖(-)、潜血1+、沈渣に赤血球5～10/1視野。  
血液所見：赤血球510万、Hb14.5g/dl、Ht46%、白血球7,800、血小板18万。  
血清生化学所見：空腹時血糖118mg/dl、HbA<sub>1c</sub>5.2% (基準4.3～5.8)、総蛋白7.5g/dl、アルブミン4.2g/dl、尿素窒素12mg/dl、クレアチニン0.6mg/dl、尿酸9.5mg/dl、総コレステロール240mg/dl、トリグリセライド170mg/dl、総ビリルビン1.2mg/dl、AST38IU/l、ALT45IU/l、LDH280IU/l (基準176～353)、ALP120IU/l (基準260以下)、 $\gamma$ -GTP94IU/l (基準8～50)、アミラーゼ136IU/l (基準37～160)、Na140mEq/l、K4.0mEq/l、Cl102mEq/l、Ca10.0mg/dl、P3.2mg/dl。

25 正しいのはどれか。

- a 過去1、2か月の血糖コントロールは不良である。
- b 血清Caのアルブミン補正は不要である。
- c 血清の外観は乳びである。
- d 尿沈渣は蓄尿で再検する。
- e 溶血検体が疑われる。

26 この患者で予想されるのはどれか。

- a 脾の萎縮
- b 内臓脂肪の減少
- c 眼底の綿花様白斑
- d 下肢の振動覚低下
- e 血清インスリン高値

27 正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 肥満症と診断できる。
- b 糖尿病と診断できる。
- c ビールを減らすよう指導する。
- d 経口血糖降下薬を処方する。
- e コルヒチンを処方する。

次の文を読み、28～30の問いに答えよ。

6歳2か月の男児。発熱を主訴として来院した。

現病歴：1週前から元気がなく、時々38℃台の発熱が現れるようになった。

発育歴・既往歴：妊娠経過は異常なく、40週に自然分娩で出生した。出生体重2,960g。Apgarスコア4点(1分)、8点(5分)。日齢3から光線療法を24時間受けた。新生児期から特異な顔貌があり、生後1か月ころに精密検査を受けた。1歳時の身長74cm、体重9kg。首のすわり4か月、つかまり立ち13か月、ひとり歩き23か月。まだボタンをうまく掛けられず、ひとりで靴を履けない。まねをして丸は書くが、四角は書けない。

家族歴：父42歳、母41歳。両親と10歳の姉とに特記すべき疾患はない。

現症：身長106cm、体重18kg。体温38.0℃。脈拍100/分、整。血圧110/54mmHg。顔の写真(別冊No. 3A)を別に示す。皮膚に発疹を認めない。第5指が短い。眼瞼結膜は貧血様で、眼球結膜に黄染を認めない。咽頭に発赤はない。右側頸部に径約1.5cmのリンパ節を2個触知するが、圧痛はない。胸骨左縁第2肋間に2/6度のやわらかい収縮期雑音を聴取する。呼吸音は正常。右肋骨弓下に肝を2cm、左肋骨弓下に脾を触知する。深部腱反射は正常である。

検査所見：血液所見：赤血球303万、Hb 8.7g/dl、Ht 26%、白血球4,600(桿状核好中球1%、分葉核好中球8%、単球6%、リンパ球63%、異常細胞22%)、血小板8万。血清生化学所見：総蛋白7.0g/dl、アルブミン3.7g/dl、総ビリルビン0.5mg/dl、AST 29 IU/l、ALT 15 IU/l、LDH 820 IU/l(基準176～353)、Fe 55 μg/dl、TIBC 320 μg/dl(基準240～310)、CRP 6.1 mg/dl。

別冊  
No. 3 写真A

28 この患児について正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 新生児仮死があった。
- b 新生児高ビリルビン血症があった。
- c 1歳時のKaup指数は低値であった。
- d 発達指数は約70である。
- e 心室中隔欠損症がある。

29 この患児で予想される染色体核型はどれか。

- a 46,XY,5p-
- b 47,XY,+13
- c 47,XY,+18
- d 47,XY,+21
- e 47,XXY

30 骨髓血塗抹 May-Giemsa 染色標本(別冊No. 3B)を別に示す。

この患児に合併しているのはどれか。

- a 伝染性単核症
- b 再生不良性貧血
- c 骨髓異形成症候群
- d 慢性骨髄性白血病
- e 急性リンパ性白血病

別冊  
No. 3 写真B